

第1回報告書 | 砂金有美

あわいの庭で待っている

Yumi Isago

Report



©momoko japan

『Engawa, Imaginary Landscapes』(2024年)より

2025年11月29日、豊橋で世界初演を迎える『Engawa, The Self in Season』は単体で鑑賞可能な舞踊作品であると同時に、横浜赤レンガ倉庫1号館振付家に就任した小尻健太とドイツ在住のハネス・マイヤー（建築家／アーティスト）が協働する中期プロジェクトの流れを汲んだ公演でもある。本作の前段には2024年末の『Engawa, Imaginary Landscapes』及びその実作へ向けたオープンスタジオやリサーチの履歴が連なっており、前回と今回はタイトル、ダンサー、振付、美術、会場その他が異なりつつも、モチーフはどちらも「縁側」だ。

そもそも、なぜ縁側なのか。舞踊が築く縁側とは？

リハーサル開始1週間前にあたる10月14日に二人へ取材を行った。（編集に際し、10月下旬のリハ期間に得た情報も盛り込んでいる）

「縁側」で「Engawa」

「自分が日本の“縁側”に辿りついたのは正直予想外でした。普通の団地育ちですし、小さな頃からバレエっ子。バレエはやっぱりヨーロッパの文化です。だけど

ずっとどこかには、ルーツに繋がるものへの憧れや懐かしさが眠っていたのかもしれない」

クラシックバレエを起点にキャリアを歩んだ小尻はローザンヌ国際バレエコンクール入賞後渡欧、コンテンポラリーダンスの最先端NDT1★1へ日本人男性として初入団した。帰国ののち個人プロジェクトSandDを立ち上げ、バレエやコンテンポラリーはもちろんフィギュアスケート、オペラ、ミュージカル等多彩なジャンルの現場へ入る。共同制作者のマイヤーは、欧州の様々な大学で教鞭を取りながら建築やロボティクスの力によるアート作品を発表してきた。2016年のゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川招聘を皮切りとする日本での活動歴ももう長い。

二人にとっては『Kizuki-au 築き合う—Collaborative Construction』（「あいち2022」参加作品）のオープニングが初めての協働公演だったが、縁側への予感はこの時点から既に芽吹いていたという。

「私の研究室チームで作った木製の舞台装置には、縁側だと解釈できるスペースがありました。上演中、そこへ座った健太の姿が美しかった。構造物に感情が宿った瞬間

間でした」

各国に飛ぶ両者のタイミングは公演後も奇遇に合致し、縁側を巡る対話の機会が増えていく。

「よく覚えているのは、パリのベンチに座って健太とたくさん話した事。宮殿の庭で、『えっ、あなたも縁側に興味か?』なんて」

廊下ではなく、ベランダでもない。日本建築特有の様式とされる縁側は家屋に暮らす人々の時間を繋ぎ、「内」と「外」を両立させる。

マイヤーはかねてより建造物の内部と外部の移行部分、公と私を超越できるような構造に関心を持っていたそうだ。玄関ポーチ等は西洋建築にも在るが、時には隣人との社交の場にも転じてしまう縁側独特の社会性の高さ、外に開放された構造ゆえの天候や気温との連動性に魅了され、独自の探究に挑戦していた。一方、近年の小尻は己の身体感覚を研ぎ澄ませていくうちに、踊る自分のからだとそれを取り巻く世界との境界に目を向けるようになっていた。そんな中でふと、「無心で自然を感じる自分」と「無心で踊っている自分」、二つのモードの不思議な相似をすくい取る。「記憶」と「今ここ」の同時再生と言えいいのか、共通点はあわいの感覚、あいまいな意識状態なのだと思いついた時、縁側の文化に光を見た。

題を英字でEngawaとしたのは、日本の伝統や物体としての縁側の再現が舞台の目的ではないからだと二人は語る。二人にとっての縁側とは、ある存在とある存在が結びつく場所に生まれる二者のあわい、言うなれば「縁」が成り立つ場所だった。

「縁側付きの家は減る一方だけれども、日本家屋の空き家を活用したプロジェクト等は目立っています。僕とハネスの考えでは、利便性は失われても、内と外をあいまいにする機能自体は求められているんじゃないかと」

この時代を映した形へ、「縁側」を変換してみたい——アプローチは異なれども、舞踊家と建築家の欲求は交差した。

「赤レンガ倉庫に振付家のオファーを頂いてすぐ、『じゃあ、ハネスと一緒に縁側を』って。必然でした」

2024年、小尻はマイヤーをメンター（協働を伴う相談役）に指名して本プロジェクトをスタートさせる。約束は2年間。横浜赤レンガ倉庫の名前を小尻が背負う時間と等しい。

「ハネスとだったら、“予想外”まで楽しめるんです」

見える／見えない／見えてくる

フィールドワークに基づくリサーチとメンターシップの導入も本公演の特徴だろう。リハーサルは主宰の考えた構成をメンバーヘン

ンプルに移すスタジオ完結型ではない。日本のレガシーが色濃く残っている京都、あるいは公演予定地の横浜・豊橋を小尻とマイヤーのみならず音楽担当のタツキアマンや出演ダンサーらまでもが歩き、土地から得た着想をリハ期間中の作品へと反映させる。音楽に組み込む海の音等の環境音や美術に用いる木材等の採集作業も並行だ。持ち込まれる素材への呼応によって舞台は常に更新され、幕が開くまで多くの要素が流動していく。

小尻曰く、リサーチに加えて他分野の専門家を年単位でメンターに据える手法は舞踊作品の制作においては決して一般的ではない。本年は舞台美術や空間演出を担うセノグラファーの役割が大きいマイヤーだが、メンターの立場ではどのような力を提供したのか。

「たとえば、僕が京都でリサーチ対象の建築を見て感じた事を口にしてみる。『これ、きれいだね』と伝えたとしたら、ハネスはその“美”を建築家の視点からナビゲートしてくれました。ハネスと違い、僕にはリサーチや建築の専門知識がありません。目の前の物の機能や意味を教えてもらって、それを受けて考えた事もさらに伝えて、舞踊に建築を取り入れるための対話を重ね続けます」

ただし、メンターは教師ではない。象徴的な出来事をマイヤーが教えてくれた。

「前作の公演会場（赤レンガ倉庫2F）には6本の柱がありました。私の眼には、天井を支えているその柱たちが空間にとって最も重要な構造に見えた」

建築家の眼を通すのならば、それは何より明白だった。「でも、同じ空間にいるダンサーたちには、6本の柱が“見えていない”と気がつきました」

身体を観客に見せる事を優先するなら、踊るための場にそびえる柱は動きの範囲を区切る障害であり、回避／無視すべき境界線と認識され得る。

「これは“見えていないふり”? それとも本当に“見えていない”?」

ダンサーの答えはバラバラだったが、対話の結果、柱たちは「触れる」「（観客の視線を）遮る」「（柱をあえて）無視



©momoko japan

『Engawa, Imaginary Landscapes』(2024年)より。赤レンガ倉庫2Fの会場

する」等々、空間、演者、観客に対してインタラクティブな装置へ変わった。

建築の講義が要るのではなく、建築家の視界を舞踊家に移す。翻って舞踊家の視界を建築家に移す。この「翻訳」こそがメンターの仕事だと昨年のマイヤーは直感する。

「本作の海外公演があったとしたら、観客はどう感じるかが楽しみです。日本文化を表現したものだと思えるか、もしくは意図が理解され、自分たちの中にも在るものだ、と受け取られるか」

建築と舞踊の共作は数多いものの、それは出来上がった建造物にダンサーを招き入れるような、ともすれば権威的な作家の建築をダンサーで飾り立てるようなタイプも少なくはなく、双方向の力が活かされる作品は珍しいとマイヤーは言う。

「日本での創作を私が継続できているのも、“縁があった”のだと思う」

余白が描く

実作前のインスピレーションを追う過程では、都市デザイン研究者のアギム・カーチュクや日本庭園研究者のエマニュエル・マレス、振付家で舞踊美学研究者の児玉北斗らマイヤー以外のプロフェッショナルのもとへも小尻は自ら赴いた。ダンサーが振付を行う場合に指摘されがちな「感覚だけでやっちゃう」事を小尻は避ける。興味を放置せず、探求心は身体感覚の言語変換を躊躇わない。その点はマイヤーも同様だ。リサーチの質は公演の質を担保しないと承知の上で、二人の目指す縁側づくりには、完成までに必要なモノやコトをクリアに理解するための正しい知識が不可欠だと考える。といっても、小尻とマイヤーが望む知識とは、既成の問いに正解できる一意解を指すのではないだろう。

「ハネスと決めたタイトルの後半、The Self in Seasonには“旬”のイメージを込めました。縁側と季節の関係は深い。日本語のままではしっくりこなくて、解釈の余白を持たせてはいますが……今が旬、といわれるように、ダンサーの身体にも“その時”にしか出せない力があるものです。そしてお客様にも、自分だけの新しい季節をみつけてほしい」

伸縮自在な可能性と親しむ二人の静けさに、協働者たちへの信頼が薫るようだった。



上下：京都でのリサーチの様子



★1 NDT (Netherlands Dans Theater/ネザーランド・ダンス・シアター)
主力カンパニーのNDT1と、若手ダンサーのNDT2により構成される。